

■ 史的唯物論 Historischer Materialismus ドイツ語

マルクスとエンゲルスによって提唱された唯物論的歴史観＝唯物史観のことで、観念論的歴史観・非歴史的＝機械論的唯物論に対立する。この論は、マルクス主義・科学的社会主義の哲学の重要な構成部分である。

■ 学説の概要 ■

- (1) 人間社会を宇宙・天体・地球を含めた自然の一部と考え、人間社会もその歴史過程の中にある、ととらえる。もちろん、人間は、自然界の他の生物とは違い、意識をもち能動的に歴史をつくる。しかし、人間は、自然条件と前の世代が達成した成果を前提とし、それに制約されて、歴史をつくる。同時に人間は能動的に行動するが、その行動が衝突・相殺し、無数のベクトル（合成力；Vector）が働いて思わぬ結果が生まれる。社会の歴史においては、無数の人間の行動によって思わぬ結果も生まれ（偶然性）ながらも、大局的な方向は自然史的・必然的な法則が貫徹する。
- (2) 人間（社会）の歴史で最も重要なものは、人間の生命の維持・再生産、生きることである。具体的には〔1〕労働（身体諸能力投下）による生活資料の獲得・生産と〔2〕次世代の生命の生産（子供を産み育てる）という二つの活動・生産である。歴史の発展とともに、①が②を規定し決定的となる。
- (3) 類人猿から人間を分化・発展させてきたのは労働である。自然のなかで自然に対する労働が社会発展の原動力である。労働が自然をコントロールする能力を〔1〕「生産力」という。この生産力は、生産諸力（具体的には、①労働対象としての自然条件・物質と②労働手段としての用具・道具・機械と③人間の労働能力）によって決められる。この生産諸力の結合の仕方が〔2〕生産（労働）様式で、大きくは農業、手工業、大工業などである。そして、この〔1〕と〔2〕に規定されて、とりわけ〔1〕の生産手段を誰がどう占有・所有しているかによって、〔3〕生産関係が形成され、この生産関係総体が社会の「経済構造」を形成する。それは、人間の意識から独立に形成される物質的社会関係である。
- (4) 人間社会は、当初、狩猟採集の低い生産力だったために、すべての人が共同で労働する原始共同体＝原始共産制社会であった。しかし、生産力の発展につれて剰余が生まれそれを独占するものが出現（私的所有）して共同体の崩壊が始まり、〔A〕人々が諸階級に分裂する階級社会（下部構造）が生まれた。これを土台にして〔B〕国家を中心とする法律的・政治的上部構造や社会的意識諸形態ないしイデオロギー（社会心理、宗教、哲学、芸術など）が形成された。〔A〕は〔B〕を基本的に規定するが、〔B〕も相対的独自性をもち、前者に反作用する。
- (5) この階級社会の主要な形態は、奴隷制、封建制、資本制であり、その出現以来、歴史は階級闘争の歴史である。階級闘争の形態は、生産（生産手段の所有）関係が生産力の発展に照応できず、その足かせになるとき、適応できる形態に変革される。これが社会革命である。例えば奴隷制（古代）が生産力発展の足かせになったとき、その制度が変革されその生産力に適合的な生産関係＝封建制（中世）社会が形成される。そして封建制が生産力発展の桎梏となって、資本制（近代）社会が形成されたのである。この資本制社会が敵対的階級社会の最後の形態である。
- (6) この歴史法則を当てはめるとこの資本制社会も生産力の発展につれて、生産力を阻害する要因が発生する。結局資本制社会は変革され、長期の過渡期を経て、搾取・収奪・暴力・階級支配のない「各人の自由な発展がすべての人の自由な発展の条件である」ような共同生産制社会が実現される。これとともに人類の前史が終わり、本史が始まる。このようにして史的唯物論は、社会の歴史の必然性と偶然性、個人と大衆の役割を初めて科学的に説明し、社会科学、歴史学の科学的基礎となった。